

序

古くから言い伝えられた諺には含蓄深いものが多い。平素何気なく使わずっかり人口に膾炙したのものには、それだけの故知、処世訓が籠められているといつてよからう。そうした諺の一つに「馬鹿につける薬はない」というのがある。これは、天性どうしようもない愚かさについて言われており、ユーモアや常識的論理を解さない人に対する諦めをこめた最終的捨て台詞に使われる。これが、さらに浪曲の文句の「馬鹿は死ななきゃあ直らない」とまで言われると人事でなくなり、他人を馬鹿呼ばわりできなくなる意味合いも出てくる。つまり身に覚えのある事として、思い当たる節がありそうである。たとえば、ここで言われているのは「馬鹿の一つ覚え」に類することで、何を為すにも一つの視点しか考えられない人間が問題になる。少しでも視点を変えれば明快に先の見透せるものを、何時まで経っても同じ視点にこだわるために、どうしても局面を打開できないでいることが間々あるのは、誰しも経験する所であろう。ことに当って行き詰まり、膠着状態に陥った場合、それまで通して来た主張、考えといったものを捨てて、改めて別の考え方で取り組んでみようというのは主体性がないように一般に難しいし、また勇気のいることと思う。しかし、「こだわりを捨てなければ先は開けない」と割切れるとすれば、「馬鹿は死ななきゃあ直らない」の文句も実感をもって理解できる。

今後、価値の多様化がますます進展する社会にあつて、企業はよりフレキシブルな対応と、より創造的提案が求められるようになり、研究活動に対する期待は益々大きくなることであろう。元来、研究とは連続的狀態に疑問を抱く所に始まり、その疑問解明に必要とされるものは事象に対する謙虚な姿勢と柔かい頭であり、こだわりのない問題意識である。研究には一方で高度のスペシャリティが要求されるが、裏を返せばそれは無限の可能性を否定することにもなる。研究を一つの創造行為として捉えるならば、特定の視点にこだわることを捨てない限り、新しい発見も進歩もないと考えてよい。

研究者は自らの専門に常に誇りを持つべきであろうが、最も陥り易い危険は専門馬鹿になり易いことである。しかし、これからの研究者は自らの専門分野と異なる視点を常に理解できるオープンな問題意識を持つことに心掛け、専門馬鹿にならずにすむ努力が必要であろう。

1984年4月

清水建設株式会社技術研究所長

工学博士 太田利彦